
きかんしゃズーマス

上総 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きかんしゃブーマス

【Nコード】

N7253D

【作者名】

上総 翼

【あらすじ】

電車で寝過ごし、終点の駅にたどりついた青年が、そこで見たものとは……。

俺は、俗に言うサラリーマンだ。
オフィスは、都心にある。家族は、まだいないけど。
でも残業もある。俺は今、残業してるところだ。

「じゃー今日は仕事切り上げようかー。」

こう言ったのは、俺の課の課長だった。
課長の一言で、同僚たちは自席から立ち上がって、帰っていった。
もちろん、俺も帰るのだが。
特に用もないので、駅に直行して、電車に乗ることにする。
ホームの列の先頭に立ち、俺は見事、座席を獲得することに成功した。

通勤ラッシュの中、座席に座れるなんて最高の贅沢だと今の俺は思う。

気付くと、俺はとんでもない所に着いていた。
電車の座席に座ってて、でも、だんだん眠くなってきた・・・。
俺はそこまでしか覚えていない。

とりあえず、ここが電車の終点みたいだ。帰りの電車を探すか。
そう思っただけは時刻表を見ている。
あれ、もう電車ないじゃん、ちよつとふざけんなよー。ここで夜を明かせて言うのか。

とりあえず俺は駅から出てみる。
夜だから景色は見えない。でも大体、どんな所はわかった。
なんだよここ、寂しい所だなー、てかコンビ二ないじゃん。たぶんホテルとかもないな。

あきらめて、俺は駅のホームのベンチに腰掛ける。

俺は、声のした方向に、目を向けてみた。俺は啞然とした。

「そう、お前のことだよ。もしかして、あれか、終電に乗り遅れた口か。」

顔のついた汽車がしゃべってるよ。なんなんだよこいつ、俺に話し掛けてきてるのか？まさか、妖怪？だったら何をされるかわかったもんじゃない。でも話せるんだったら交渉の余地もあるよな。できる限りやってみるか。

「そうですけど、あつあなたは一体何物なんですか。」

恐怖心から、思わず敬語を使っていた。

「俺の名は、機関車ズームス。」

ズッズームス？なんだそれ、その名前どこかで聞いたことあるぞ。

「どこどこから来たんですか。」

「ズームスランドだ。この近くの遊園地の地下にある。」

ズームスランド？まるでどこかの国の遊園地みたいだな。

「で、今日はここに何をしにいらしたのでしょうか。」

「今日は、試運転でこの路線を走行している。そうだ、お前、どうせ帰る手段ないだろ。だったら俺に乗ってかないか。運賃は298円でいいぜ。で、お前の家はどこだ？」

「こつ国分寺です。とッ東京の。」

やばい、俺、完全にあつちのペースに乗せられてるよー。でも、乗せてやるって・・、まさかあの椅子の上かよ。明らかに上にただ置いてあるだけじゃん。

「国分寺か、お安いご用だぜ。俺の最高速度は時速7000キロだからな。40秒で着くぜ。」

この汽車って足で走るんだろ、そんな速度出せるはず・・あるかもしれない。

あの後ろのついてたロケットの噴射口みたいなもの、まさか。しかし、こんな吹きさらしの席で時速7000キロは危険すぎるだろ。でも40秒で着くのかー。あー駄目だ駄目だリスクが高すぎる。だから298円なんだー。

「どうする、俺に乗るのか、乗らないのか。どっちだ。」

すごい剣幕で俺に聞いてきた。

どうしようかなー、朝までここにいるのも嫌だしなー。かと言ってあの椅子の座るのは怖いしなー。

「そうか、上の席に座るの嫌か、わからないでもないな。でも席はこれだけじゃないぜ。」

ここだけじゃないって、他の何処に席があるんだよ。

「その席とは一体何処のことでしょうか。」

「煙突の中だ。」

何言ってんだこいつ。煙突の中が座席、ってふざけんじゃねーよ。でも、ここできれても何されるかわからないからな。少し探りを入れてみようか。

「煙突から煙、出てますけど、これってなんなんですか？乗っても平気なんですか？」

「煙？あーこれか。これは雰囲気をだすために焚いてあるだけで、こんなのなくても走れるぜ。」

そう言つと、ズームスは煙を消してみせた。

まあ、これなら乗れないこともないか。でも、本当に国分寺までいつてくれるのだろうか？本当はあの世行きだったりするかもしれない。

「乗るなら早く乗れよ。もうすぐここ出発しないといけねーんだよ。」

面白い、乗ってやるか。俺は煙突の中の席？に座った。

「じゃーいくぜ。お客さん。しっかりつかまってな。」

ロケットの発射する時のような爆発音とともにズームスは出発した。あまりの衝撃に、俺はその瞬間、意識を失った。最後に「ポーン」と音が聞こえたような気がした。

、昨夜から、東京都の国分寺市から山梨県の河口湖町にかけての
一帯が壊滅状態に陥っています。原因は今だ、わかっておりません
が、調べによりますと、隕石みたいなものが落下したと言う目撃証
言もでており、現在も調べをすすめています。、

荻原のやつ、今日会社に来れないかもしれないな。だってあ
いの家、国分寺だろ。

課長はテレビを見ながらそう思った。

、今入ってきたニュースです、さきほど東京駅の駅長あてに、脅
迫文めいた文書送られてきたことが明らかになりました。、

なんだなんだ、テロでもやろうとしてるのか、こっから近いし、
やられちゃ仕事ができなくなる。

荻原のことなど一気吹っ飛んだ。

課長は食い入る様の画面を見ていた。

、この文章には、今日、12時丁度、東京駅16番ホームに、機
関車ブーマスなるものを入線させるのでホームを空けたいしてほしい
と言う内容が書いてありました。JR東海は警察に連絡するととも
に安全のため東京駅の新幹線ホームをあけて置くことを決定しまし
た。警察も、悪戯、テロの両面で対策をすすめていくとの事です。、

今回の出演は、

俺こと萩原啓一。

課長こと小野寺明人。

そして、

ズームス

でした。

（後書き）

自分なりにホラーを書いたつもりですが、読んでもあまり怖くはないと思います。まだ経験不足なもので・・・皆さんの評価をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7253d/>

きかんしゃズーマス

2010年12月10日00時13分発行